

保険薬局からの情報提供で薬剤師外来と薬薬連携が行なえた1例

○吉田 啓太郎¹, 大窪 典子², 永崎 一樹¹, 杉尾 由希子², 津曲 恭一², 北島 久義², 落合 晋介³ (¹都城会営薬局, ²都城医療センター薬, ³都城薬剤師会)

【目的】第50回日本薬剤師会学術大会で、一般社団法人都市北諸県郡薬剤師会会営薬局（以下、会営薬局）と独立行政法人国立病院機構都城医療センター薬剤部（以下、薬剤部）の薬薬連携基盤作りについて報告した。そして、日本薬学会第138年会および第51回日本薬剤師会学術大会では、会営薬局と薬剤部の連携により患者QOL向上に寄与した例を報告した。

今回は、薬剤師外来との連携で患者QOL向上に寄与できた例について報告する。

【概要】FOLFIRI療法を行っていた外来患者で、FOLFIRI療法を行う際に制吐剤を併用していたが、嘔吐Grade2だった。そこで、会営薬局の方から疑義照会してデキサメタゾン内服が追加になった。その後、予期性悪心の可能性が出てきたので、薬剤部の外来担当薬剤師に情報提供し介入してもらった。

【結果】外来薬剤師の介入後、予期性悪心は否定され、デキサメタゾンを継続することになり、外来担当薬剤師から情報提供があった。デキサメタゾンによる血糖上昇が懸念されたので、血糖値に関する検査項目を追加してもらい、診察の結果シダグリブチンが追加となった。シダグリブチンにより、HbA1c 6.4%→5.8%と良好な血糖コントロールを行うことができた。また、デキサメタゾンの内服で嘔吐Grade2からGrade0に改善することができた。

【考察】会営薬局からの情報提供をきっかけに、薬薬連携でFOLFIRI療法の副作用を抑え、治療を継続させることができた。

がん化学療法を受けている患者を中心とした薬薬連携の基盤を作り、入院患者だけでなく、外来患者についても薬薬連携を行えるようになった。今後は症例を積み重ね、なぜ連携を行えるようになったのか明らかにしていきたい。